

自由部門 学長賞「いただきます」

教育学部児童教育学科 1年2組 上地 桃華

「いただきます」

食べることで、私たちは栄養を補給している。生きるために、命を奪っている。あなたは食事の前に、心を込めて「いただきます」を言っていますか？

私の父は串焼き屋を営んでいる。高校を卒業してから、私も店を手伝うようになった。夏休みに入るころにはずいぶん仕事にも慣れてきた。大学も休みなので、普段より頻繁に店に通っていた。

ある日、私はいつも通り仕事を終え、カウンターの隅で父のつくった賄いを食べていた。目の前には、冷蔵のネタケースがある。赤黒いキモやハツ、綺麗なピンク色をしたササミやセセリなど、串に刺さった生の鶏肉が部位ごとに分けて並べてある。焼かれる前のソレらは全然おいしそうに見えない。調理すれば、こんなにおいしいのに。

食べ終わって母の仕事が終わるのを待っている間、私はまた、ネタケースを眺めていた。何かの小説だったろうか。友人が言った言葉だったかもしれない。「人間は動物のバラバラ死体を食べているのだ」みたいなフレーズを聞いたことがある。それをふと思い出して、「ああ、だったらコレは、鶏のバラバラ死体だな」と思った。なんか、少しグロテスクかもしれない、とも思ったが、だからといって気持ち悪いとか、もう食べたくないとか思ったわけではなかった。いまいち、自分が食べていた“焼鳥”と“生きている鶏”が同じものの様に感じられなかったからである。

暇だった私は、「このバラバラ死体は元々鶏のどこの部分だったのだろう」と気になって、調べてみることにした。スマートフォンを使って検索すると、すぐに説明画像が出てきた。やけに可愛い鶏のイラストで説明されており、少し可笑しかった。

キモやモモは名前から想像できる通りの部位だった。セセリが首のあたりということや、ササミがムネ肉の近くにあることは、初めて知った。バラバラにされていると認識することが難しいけれど、コレもちゃんと生き物だったのだな。そう思うと、ガラスの向こうに並んだ鶏だったモノたちが妙に生々しく感じられた。私は命を頂いていたのだな、と実感した。

「一度、まるごと一羽買ってきて、さばいてみるか」

家で、鶏肉の部位について父と話していると、父が突然そんなことを言った。もちろん冗談だったが、私は少し興味があった。

父の話によると、何かのテレビ番組で、子どもたちにヒヨコを一羽ずつ与え、育てて食べるという企画があったらしい。名前をつけて可愛がって育てた鶏を、唐揚げにして食べるのだ。

私はその番組を見ていないので詳しいことはよくわからないが、その企画に参加した子どもたちにとって、その鶏を食べるといのはとても苦しい決断だったのではないだろうか。生き物を殺して食べるという行為は、私たちが普段からしていることだ。しかし、その“食べ物”の“生き物”だったころの姿を知っているだけで、殺して食べるという行為に躊躇が生まれる。それでも食べると決めた時、「命を頂いている」ことを意識し、感謝し、責任をもって食べることが大切なのだと知る。

世の中には、なんとも思わずに簡単に食べ物を残す人もいる。毎日大量の残飯や廃棄食品が出ている。皆、“生き物”と“食べ物”が頭の中で切り離されているのだろう。命を頂くという意識が欠如しているように感じる。しかしそれは、その人たちが全面的に悪いのではなく、単に経験の少なさからくるものではないだろうか。

私たちは、生き物がさばかれて食べ物になる瞬間を見る機会がほとんどない。私たちが目にするのは、適当な大きさに切られ、パックに詰められたものだ。最近では、冷凍食品やレトルト食品も進化している。何年か後の子どもたちは、生肉を見る機会も無くなってしまうかもしれない。

知らない、考えないというのは怖いことだ。私は、ブロック肉を父が切っている姿を小さいころから何度も目にしていた。しかし、そこから元の動物の姿は想像できなかった。いや、想像しようともしていなかった。動物は“生き物”、肉は“食べ物”だった。“食べ物”は残してはいけない、感謝して食べなくてはならない。そう教えられて、そう思っていた。でも、今まで自分の頭で深く考えたことはほとんどなかった。“食べる”ことがあまりに身近で、“殺す”こととあまりに距離があったから。

鶏のバラバラ死体のおかげで、私は考える機会ができた。今更だけど、“食べる”ことが何なのか、少しわかったような気がする。私がいつか出会うかもしれない教え子たちには、もっと早くこのことに気付いてほしい。気付いてもらえるように接したい。子どもたちに真剣に向き合うだけでなく、“食べる”ことに、もっと真剣に向き合おうと思った。

「いただきます」から始めよう。手を合わせて、命を頂くことに感謝して。

<講評>

食べ物を通していのちと向き合うということを丁寧に描写している作品である。串焼きとしての鶏肉からいのちの在り様を描写する意外性が読者の興味を喚起させる。仕事を共有する親子の時間をさらりと触れつつも、仕事をする親の後ろ姿が筆者の意識に与えた影響を読み手に印象付けている。今年のクリスマスはローストチキンが食べられなくなるのではと思わず思ってしまった。生き物を食すという人間の行為は太古の昔から続けられていることだが、「命をいただく」ことに対して「感謝」の気持ちを常に持ち合わせているか否かを突き付けた点が素晴らしい。そしてこの重大な視点を自分の身近な事例で述べたことが勝因である。因みに、「いただきます」に相当する英語は何か。まさか「Thank you」や「I will receive」ではないだろう。日本に文字(漢字)が伝わった時、自分たちの現実を文章にしようとして大学寮(高級官僚養成所)の秀才たちは、中国語以外の書き言葉、すなわち漢文を作り出した。中国語の単語では日本の感性=姿が表現できなかったからである。総じてこの「いただきます」というタイトルのエッセイは、すぐれて日本人の感性、文化を表す言葉で、自分の体験からそれに向き合うところまで行き着いた秀逸な作品である。

審査委員／永田彰子、吉目木晴彦、大庭由子、西村聡生、富岡治明(委員長)